

書評



宮川行志著

『不知火海の焔 しらぬいのうみのほむら』

文芸社、2017年

評者 後藤 岩奈

新潟県立大学国際地域学部

I. はじめに

宮川行志氏の著書『不知火海の焔』を紹介して頂いたとき、筆者は次のようなことを考えた。筆者は中国語教育、中国近現代文学を専門とする教員であるが、幼少期を熊本県菊池郡西合志町（現在の合志市）で過ごした経験がある。現在新潟市在住で、新潟水俣病の問題にも文学の立場から関わることを考えており、八代海を臨む水俣市にもたびたび訪れている。また自身が幼少期を過ごした故郷、郷土を文学作品として表現することに興味がある。このようなことから、不知火海沿岸を舞台とした作品を収めた同書の書評をやらせていただくこととした。以下、同書所収の三編の小説の内容を要約紹介し、それらに見られるものを述べ、最後に私的な内容を含むが、作品から気づいたことを述べてみる。

II. 「揺れる不知火」の内容

羽田発熊本行 J A S 1 1 5 便に浦中太郎の姿があった。彼は一部上場企業である三橋商事の水産物輸入セクションのサブマネージャーであった。五年前にタイ支店に派遣され、ブラックタイガー（エビ）の養殖から買い付けまでを手掛けていたが、取締役営業部長の判断で、不採算店としてタイ支店は閉店に追い込まれる。さらに太郎は、帰国して五年ぶりに会った妻から拒絶され、営業部長と妻の関係を確信した。太郎は四十代半ばにして、辞職と離婚を考えつつも、会社や妻には何も語らず、故郷の父の元へ向かっていた。機内では、隣の席に座っている小学校六年生くらいの眼が少し不自由な少年と、その母親である中年女性と言葉を交わす。母親は夏目愛子といい、不知火を見たいという息子次郎太と一緒に、夫に内緒で熊本へ向かっていた。太郎は次郎太に、自分の故郷である不知火町の「不知火」について語り聞かせる。

太郎は J R 松橋駅からタクシーで国道 2 6 6 号線を西に向かう。不知火干拓の干潟へゆき、マングローブ植林に入り、潮溜まりの海水を口に含み、マングローブの葉を噛む。干潟の海の生物たちとその自然の連鎖を目にして、「精神の安定をあたえてくれる」ように思えた。

太郎の帰省はいつも唐突で、実家では、父の松太郎が網を繕っていた。煙草を吸い、焼酎を飲み、台風18号の高潮で亡くなった母セイコの話になる。

お盆明けの潮時を選んで、松太郎と太郎親子は網漁に出る。不知火干拓は、太郎が生まれる十年前の昭和二十六年に着工された。昭和四十二年に干潟が完成するが、漁師のなかには、漁業権の放棄を迫られて、補償金をもらって陸に上がる者も多かった。松太郎は船で卑猥な俗謡を歌い、焼酎を海面に注ぎ、恵比寿様に大漁を祈る。太郎が小学校一年生であった昭和四十三年、熊本大学の山下先生の不知火観測の手伝いで、松太郎の船を実験船としたが、村の者からは「不知火町のシンボルである不知火を科学的な解明に協力するなどけしからん」と村八分にされ、エンジンと発電機に細工をされ、その結果、干潟に突っ込み、二人は死にそうになった。そのとき見た謎の赤い光芒は不知火だったと二人は確信しており、そのときアカエイの大群が鰭で濁をかきやり、二人は濁から脱出した。

この日の漁は袋網が破れそうになるくらい魚が入り、太郎は飛び込んで包丁で袋網を切り離す。中はアカエイであった。エイは大漁の使者で、闇夜にエイの大群があがれば翌日は大漁と言いつたされている。翌晩は松太郎の予言どおりの大漁だった。

八朔の前に、愛子と次郎太が来る。太郎は彼女らが来ることに賭けていた。「人間にとって全ての現状は仮説で生きている。この仮説から離れるには賭けしかない。今一番可能性のあるものに。」

平成十三年（2001年）九月十七日は旧暦八月一日八朔、永尾神社の祭礼である。太郎は愛子、次郎太と手をつないで歩き、幼なじみに、家族連れか、と声をかけられる。

不知火は実在の灯火の形が多様に変化して見える現象に過ぎない。そして、そんないろいろな光源からの光が、この海上を通過してきて観る者の目に入る間に起こる複雑な屈折現象が不知火である。

人間の存在も、家族という光源が、周囲に関係する人々を照らす暮らしの灯火であり、それは日常の暮らしのない家族という特別な灯火が見えるのではない。家族は実在する人間の親子・兄弟姉妹の営みが多様に変化して見えるのである。(p37)

愛子は太郎の耳元で不知火にまつわる短歌を誦し、「現状打破には今の状況から距離をおいて見ることだと気がつきました。次郎太は心も病んでいます。主人は次郎太の心を癒やすことより仕事仕事です。(中略) 不知火の火を見ていて、これでよかったのかという思いと、現状に浸かっていたいという思いと……」と告げる。太郎も、「現状は仮説だし、これからどのように変化するかは推察できるが、その時になってみなければわからない」、妻のことだけでも揺れる心の方向づけをしようと思った。

翌日、松太郎は次郎太に永尾神社のいわれを語る。エイは神の使い、漁の案内人であり、安産の神様、航海安全の守り神という。次郎太親子と松太郎親子はエイ捕りに出かける。甲板で松太郎は少し卑猥なエイの昔話を語って、言う。

「不知火は人間の心たい。その時々によらゆら揺れていくのが人間。過ちは過ちとしてそりゃ仕方がなかと。人間過ちをしない者はいない。輪廻転生たい。もう一度今夜しっかりと不知火を見てから、自分の心をしっかりと覗くと、いい思案が生まれるもんだ。つまらんおせっかいかな」(p45)

Ⅲ. 「海の火事」の内容

大和水産バンコク支店長としてエビの養殖に携わる四十半ばの松田始は、二十五年ぶりに故郷である天草の御所浦町へ戻る海上タクシーに乗っていた。呆けが始まった母菊枝を老人ホームに入所させるための帰郷であった。船内で、御所浦町から全島博物館構想のため北海道に恐竜の調査に派遣されていた学芸員島田一郎と知り合う。島田は博物館の構想を熱く語る。横浦島沖で、始は海水が赤色に変色しているのを察知し、これは「海の火事」、すなわち赤潮発生の前兆だとして、かつて同級生であった海上タクシーの船長浜田栄一に告げ、島々では「緊急事態」として対策が始まった。始はタイ政府と組んだマングローブ林でのエビ養殖事業で、赤潮発生のためエビを全滅させてしまった経験があった。

島に着くと、始と浜田は御所浦町役場に甲斐田町長を訪ねる。二人の迅速な対応に感謝する甲斐田。始の母菊枝の老人ホーム入所は、この甲斐田が手配をしてきていた。菊枝の世話をしていた妻の三重子は東京の証券会社の社長秘書であったが、始とバンコク現地秘書との関係を疑い、「もう疑似家族はやめましょう、何の向上もないのに。お互い若くはないし、出直しのスタートを早くした方が利口よ。あなただって若い子がいるんだもの」と言って、呆けの始まった菊枝を置いて東京に戻ってしまい、捺印された離婚届を送ってきた。誤解を解くのは無駄だ考え、始はこれに応じる。甲斐田町長は政治家として、島々のインフラ整備、すなわち島々を結ぶ架橋の構想について熱く語る。始は赤潮の対策について語り、養殖業者のモラルの低下が養殖漁業を駄目になっているのだと思う。甲斐田は彼の家で二十五年ぶりに帰郷した始の歓迎会を開くという。

甲斐田の家を訪れる。宴席には、海上タクシー船長、養殖業、漁業協同組合長、町議会議長、小中学校校長など町の名士が二十名ほど揃っていた。唯一の女性は、甲斐田の妹啓子であった。始はかつて高校生のころ、この啓子に想いを寄せており、彼女の姿を目で追っていた。そのうち、かつての同級生で養殖業者の宮田虎造が泥酔して隣に座り、彼の家泊まるよう言う。虎造も啓子に想いを寄せていた。

明け方近く、酔いから覚めた始は虎造の言葉を思いだし、虎造の生け簀に行くが、後ろから啓子もやって来た。

——そうだ、すべての現状は仮説なのだ。人間はそれから離れて、どのようにも暮らせるのだ。現状は仮説に過ぎないのに、現状の何かを壊さぬために、夫婦の間でも、親子の間でも、兄弟の間でも、まして友人の間でも、恋人同士の間でも、本当のことを言

わぬのは当然という空気に俺は溺れていた。それが常識であり、慎みであり、己を今まで律してきた鎖であった。今、俺は自分の選んだ道が失敗だと気づいた。失敗したとわかった今、現状にどっぷり浸かっている俺は、これくらい楽なことはない。このまま浸かっていたいと思う。そうだ、人間なんて、いや四十面さげた男が浸かっていなきゃ、酒を飲むか、賭け事をやるか、女に手を出すか、仮病使うか、何かで人間は逃げるものだと、昨夜、中学校の校長が言ったが、その通りだ。俺は鎖を切ろうとしている。(p80)

啓子は虎造に求婚されていたが、始を待っていたという。

「行動を起こさないと何も起こらないとよくわかったわ。虎造さんにもこの際、はっきり言うわ。真実、本当のこと言うわ。それがあの人にとってもいいことだと気が付いたの。『海の火事』がわたしの心もあぶり出したわ。こんなこともあるのね」(p81)

「この『海の火事』と言われる赤潮も生命体なんだ。植物プランクトンであってもちゃんと呼吸をし活動する。幾千万だか、幾千億、何億兆だか知らないけれど、無数の生命が、自分を生かすために相手をぶっ殺している。それが自然なんだ。いや、神様がいるとすれば、神様がそうお創りになったんだよ。神など俺にはよくわからないが、何かを傷つけることは確かに自分も傷つくのだ。人を傷つけないことなんてあり得ないんだよ。俺は、もう浅ましく生きることにしたんだ」(p82)

始が啓子と唇を合せているところを、虎造が「嫉妬と怒りの目を光らせて」見ていた。「夢なんて所詮壊れるものとはわかっているんだが、夢は叶えられなくてもいいから先の方がないと困るんだよ。俺はこんな身体だから、争うのは嫌なんだ」と、水俣病のため動かない右足のことを言い、「俺と争えよ」という始の挑発にのらず、「もう駄目だ。すべて子供の時から始に大切なことは譲ってきたもんな。譲るよ、譲っていいものなら。争いは嫌だ。でもな、何かを求めて生きていかねばならない」と、「生涯でただ一度の命令」だとして、三人で生け簀に入るよう言う。始と啓子は虎造の言葉に従って、虎造と共にウェットスーツを着て生け簀に入る。三万尾ものトラフグが渦を巻く生け簀の中で、始は目の前が真っ赤になり、海水を飲みこみ、浮上するが、虎造が浮上しない。虎造は動かない右足を網の袋の部分にからませ、呼吸をしていなかった。始と虎造の酸素ボンベのチューブには穴が開けられていた。ことの真相は分からず、警察は虎造を溺死事故として処理した。始は疑念に取りつかれる。虎造は赤潮の湧出を経験的に知っていて生け簀に誘ったのか、始と自分のチューブに酸素ボンベを背負わせた時、穴を開けたのか、と。

始は啓子に別れを告げる。「海の火事」は、「始の心にも火傷を作り、虎造を死なせ、啓子の希望を打ち砕いた。」そして「島の人々すべてになにがしかの火傷を負わせた。火傷はケロイドとして残るのか。それとも跡形もなく癒えるのか。この周辺の島の人々だけを責めら

れない。海に流れ込むすべてのものに、人々が気をつけてこそ「海の火事」のケロイドも癒える。「今、心にできた新たな傷（中略）を味わうことも、今の俺には何よりの癒やしになる」と思いながら、始は故郷を去る。

IV. 「太郎のパン」の内容

浚渫業を廃業して十年の、七十九歳の千葉鉄太郎は、今ではカメラが趣味で、北海道での撮影旅行から帰って熟睡した。目を覚ますと、妻の誠子は絵画教室の発表会の準備で外出していた。家事を一切したことがない鉄太郎に、朝食と、昼食のあんパンを置いていった。鉄太郎はあんパンが大好きである。子供の時から、あんパンを食べる時は、必ず、両手に一個ずつ握って、交互に食べる変な癖があった。

右手のパンから、おもむろに口に運ぶ。この歯ざわりふんわりしていて軽やかな食感が好ましいのである。ゆっくりと咀嚼する。そう、鉄太郎は五、六回噛んでのみ込むのはもったいないので、いつも三十回はゆっくりと咀嚼してからしかのみ込まないのである。のみ込んだあと、舌で両頬をゆっくりなぞる。総入れ歯の裏側もていねいに舌でなぞる。小豆の香気と甘味が残っているのである。この感触が好きなのである。子供の時からあんパンを食ったあとは、何も飲食しないことにしている。せっかく口の中に残っているあんパンのうま味が消えてしまうからである。勿論、歯などあんパンを食べたら磨かないことにしている。(p104)

鉄太郎の家は、小倉で三代続いた名の知れたパン屋であった。屋号は「朝日屋」だが、曾祖父市太郎、祖父佐太郎、父太郎と、三代の名前にはかならず「太郎」が入っていたため、世間では「太郎のパン」と呼ばれていた。大正八年以後、陸軍、海軍とも脚気防止のため週一回のパン食を導入し、軍都小倉で「朝日屋」は大いに儲けた。しかし、戦時下に入ると食糧統制が敷かれ、昭和十五年、鉄太郎が旧制小倉中学校に入学した年、新体制運動が起こり、砂糖購入制限令が施行され、「ぜいたく禁止令」が公布されて「ぜいたくは敵だ！」の看板が立てられ、パン屋「朝日屋」は死活問題となる。それでも鉄太郎は、こっそりとパンを焼いてもらっていた。

鉄太郎は、食卓上の新聞の「お悔み欄」に、「高田速人 九十五歳」という名前を見て、中学時代を思い出す。高田速人は当時、配属将校・陸軍中尉（予備役）で、軍事教練と漢文を担当しており、その性格から、生徒からは「ババット」と呼ばれて恐れられていた。小倉中学でも、昭和十七年、鉄太郎が三年のときから軍事教練が始まる。鉄太郎は小柄で丸顔、肥満体質であったため、高田教官の激しい苛めを受けるようになる。「このままでは殺される」と考えた鉄太郎は、親友の元橋から、高田教官の家族に肺病の病人がいる、栄養の高い食べ物が必要なので、苛められないようにパンで買収するよう勧められる。鉄太郎は高田教

官にパンで慰問する約束を交わす。約束の日曜日、八幡の帆柱町の坂の上までパン、バター、チーズを持って行くが、途中転んで落としてしまい、台無しになり、教官に渡すことができなかった。それ以降、それまで以上の、ものすごい苛めと暴力が鉄太郎に加えられるようになった。見かねた母のモトが改めて風呂敷包を教官に持って行って、ようやく苛めと暴力は止んだ。

その後、戦局は次第に悪化していった。昭和十八年の初夏、土浦海軍航空隊から少年飛行兵募集のため、真っ白い制服制帽の凛々しい青年将校が小倉中学にやって来る。全校生徒が集められ、時局講演会が開かれ、「聖戦」の意義が説かれた。

——国家は今、俺に期待し、俺を必要としている。

という気宇壮大な想いが、心中にふつつつと湧いてくるのをおさえようがなかった。鉄太郎は自分自身が泳げもしないことなど、もう頭にはなかったのである。いわば集団催眠術にかかったような状態である。教唆、扇動、挑発するようなものである。純情な中学生の心をつかみ、興奮させて、「ようし、行ってやる！」という気にさせてしまうのである。

当時の鉄太郎たち少年は純粹である。本気で国のことを考えている。皇国教育を受けているのでなおさらである。青年将校の講話を全身全霊で受け留める。受け留めるだけでなく、直ちに行動に移そうとする。(p129)

高田教官から「陸士（陸軍士官学校）を受けたらどうだ」と言われるが、「——あんなくそいまましい奴がいる陸軍などくそくらえだ」と、十月に海軍航空隊予科練の採用試験を受け、鉄太郎も元橋も合格する。十二月には三重海軍航空隊に入隊した。しかし予科練での訓練は、とても厳しいものであった。「海軍あんパン」が出る食事だけが救いであり、涙が出るほどうれしかった。そして予科練時代の回想から戻る。

昼ごろ、ある老人が訪ねて来る。パン屋の「朝日屋」を探しているという。それは中学時代の親友元橋耕助だった。彼は左足が義足で、予科練の訓練中の事故で左足を切断することになったという。戦後、勉強し直して私大の医学部に入り、外科医となり、横浜で息子と整形外科医と老人保健施設をやっているという。小倉中学時代の高田教官のことで訪ねてきたという。話によると、彼の外科医院に小杉という若い整形外科医が入ってきたが、その母親が、高田教官の三番目の娘で、かつて肺病を病んでいた人であるという。小杉は九十五歳の祖父高田教官を元橋の老人保健施設に入所させて欲しいと頼んだとのこと。受け入れたところ、半年もしないで亡くなり、昨日が葬儀であった。

「俺たち、軍国少年だったこと、忘れてるんじゃないよな。思い出さないことにしているんだ。言えば痛いもんね。(中略)戦争なんて、ふだん忘れちゃっているもんな。俺は毎日、あんパン食っているが、もうあの時代のこと思わないようにしているんだ。」

あんパンの餡のように、甘い、おいしい人生……と思うことにしているのさ」(p151)

高田教官は亡くなるときに遺言書を残しており、娘と孫を理事にする条件で、土地三千五百坪を元橋の病院に寄附したという。元橋の老人保健施設もまた、資産のある配偶者のいない老人や、子供のいない老人を入所させて、資産を寄附させてきたという。鉄太郎は、元橋の老人健康施設の共同経営の話、出資の話を断る。

「あんパンの人生は、甘い、柔らかい夢のある人生で終わりにしたいのさ。今の俺の願いは、写真コンクールで大賞をとるといふ、ささやかなものさ。お前の病院や老人保健施設経営には及びもつかないが、根が同じさ。予科練で国のため、死にそこねた分を、今、とりもどしているのだから。とにかく、俺には君の願いは聞き入れられないということだ。あの八幡の坂道には行かないよ」(p159)

鉄太郎は元橋と別れて部屋に戻って考える。「『太郎のパン』を、復活させてもいいな。あんパン修行をこれから始めるか……。」

V. 三つの作品に見られるもの

「揺れる不知火」の主人公は、四十半ばで仕事に挫折し、妻とも別れようとしている、水産物輸入業の商社マンである。作品中、作者が幼い頃から慣れ親しんで、熟知していると思われる不知火町の風景、マングローブ、干潟や海中の生物たち、とくにエイの生態、干拓・干潟の歴史とその住民生活への影響、「不知火」の伝承と科学的な事実、地域の俗謡、昔話などが述べられ、それらが、主人公の家族の有り方、飛行機で出会った母子との関係を照らし出す。その関係がどうなるのか、結末は分からない。

「海の火事」の主人公も、「揺れる不知火」と同様に、四十半ばで仕事の挫折を経験し、妻と別れた水産業の商社マンである。天草御所浦町の島々の風景、漁村の人々の生活、養殖業、生け簀、架橋や観光などの島の振興などが、「赤潮」というテーマを中心として、「赤潮」についての科学的知識の裏付けをもって、詳しく描写されている。本来災難ともいえる「赤潮」も、その強力な力から、時として人の生き方、人々の生活、地域のあり方にも転機をもたらすものとして描かれているようである。

「太郎のパン」では、自家のパン屋で作っていた大好きなあんパンに対する主人公の「思い」、「こだわり」を軸にして、戦時中の中学校の友人たち、軍事教練、苛めを加える教官、予科練、老後のエピソードが絡めて描かれる、いわば「あんパンに映し出された自分史」である。

作者の生まれ育った故郷、郷土の自然や風土、作者の幼い頃から身の周りにあるもの、慣れ親しんだもの、熟知しているもの、強く印象、記憶に残ったもの、そういったものの中から

ら、自分が「生きてゆく上での糧となるもの」を見出そうとしているように思われる。少し硬い言い方をするなら、その人の「哲学」を見出そうとしている。それは、教科書に出てくるような世界史上の哲学者たちの哲学とは違った、市井の、庶民が、生きていく上で糧とするもの、信じるものとしての「哲学」である。あるいは、「家族のあり方」、今後の人生の有り方、生きる方向性を与えるもの、投影するもの、考えさせるものである。「全ての現状は仮説である」。現状それ自体は絶対的なもの、既定のもの、固定されたものではなく、本人がどう感じ、どう考え、どう行動するかによってその状況が変わる。そういったものを映し出すものとして「不知火」「赤潮」「あんパン」が象徴的に扱われているように思われる。三つの作品に見られるこれらの発想、「哲学」は、筆者自身も、今後の生涯、今後の生き方を考える上で、応用できそうな気がする。

VI. 主人公千葉鉄太郎 作者宮川行志氏 そして後藤昭

ところで、「太郎のパン」を読んでいて、意外な事実に気づいた。主人公千葉鉄太郎は昭和15（1940）年に旧制小倉中学入学、平成18（2006）年に79歳とすると、昭和2年生まれと考えられる。この鉄太郎の経歴と、筆者の父親である後藤昭^{あきら}の経歴に重なるところがあるのである。以下、私的な内容となってしまうが、筆者の父親後藤昭の経歴を述べてみる。

後藤昭、本籍は大分県竹田市、昭和2（1927）年、福岡県小倉市篠崎^{さとみ}（現在の北九州市小倉北区篠崎）にて、陸軍軍人の家庭に長男として生まれる。祖父里見は福岡、大分の学校で軍事教練を行っていたという。その軍事教練を経験した人の話では、とても厳しいものであったという。のちに大分県竹田に居を構え、竹田小学校、旧制竹田中学校（現在の竹田高校）を経て、陸軍士官学校に入学、昭和20（1945）年に18歳で終戦となる。終戦の直前に祖父が亡くなる。その後、第五高等学校（現在の熊本大学）を経て、東京帝国大学農学部入学、1952年に農林省（当時）に入省、1957年から1977年まで九州各地の農業試験場に赴任。1987年に定年退職、2006年に79歳で亡くなっている。

生前父は、戦争中のこと、昭和20年以前のごことは、晩年に病床で少しかだけ語ったのを除けば、一切家族に話をしなかった。それは鉄太郎のセリフに一致するように思われる。

「なぜ、どうしてこの^{おびただ}夥しい数の二十歳未満の若者たちが、米英撃滅の熱気に包まれて、自分の生命を放ってまで志願したのか、今もって、俺には答えがわからん」

「この時の自分の気持ち、自分のとった志願という行動を、他人に理論的に、整合性を持って説明することは誰にもできない。俺だってそんな頭脳など持ち合わせていない。ただ、俺たちの心の軌跡は、俺たち同士でしかわからない。もう、時間もないよ。平均寿命を超えた今、誰かに明かしたいとも思う。……だが、妻にも子供たちにも話せなかったな……」（p153～154）

また父は生前、詩や俳句、外国旅行記を自分で印刷して周囲の人に配布していた（ちなみに文芸社からも沖縄に関する詩集を自費出版している）。一度筆者が「(父の) 中学時代のことが読みたい。中学の頃のことを書いて欲しい」と言うと、いったん自分の部屋に戻り、再び出て来て、「中学の頃はいいことは何もなかった。だから書かない」と言った。「太郎のパン」中の鉄太郎の言動は、まるで筆者の父の内面を代弁しているかのような内容、展開である。もっとも、「昭和ひとケタ」と呼ばれる世代の人たちには多く見られること、この世代には普遍的な内容であるのかもしれない。

作者宮川行志氏の経歴について。『不知火海の焰』の「著者プロフィール」によると、「昭和10（1935）年1月、熊本県宇城市不知火町に生まれる。昭和32（1957）年熊本大学教育学部卒業。以後、平成7年3月まで38年間、小・中学校教諭、校長等歴任」とのことである。このほかに、少し調べさせていただき、小学校のハンドボールの普及に尽力されていたこと¹⁾、宇城市の広報誌『広報うき』に「論語」の言葉を紹介されていること²⁾、中村貞夫編『熊本教育の人的遺産』に「松田喜一 百姓の神様」を執筆されていることを知った³⁾。この松田喜一氏は松橋町（現在の宇城市）出身の農業研究者、教育者で、1920年に肥後農友会実習所を菊池郡西合志村（現在の合志市）黒石原に開設されたという。この黒石原はのちの1950年に「農林省九州農業試験場」が開設された付近で、筆者の父が1969年から1977年まで赴任し、筆者が幼稚園、小学中学時代の9年間を過ごした場所である。ちなみに筆者は、大学大学院と非常勤時代の計10年7か月を北九州市小倉で過ごしている。このため筆者は、宮川氏のこの作品集に何か因縁のようなものを感じるのである。

注

- 1) 榎山佑子、柳沢和雄、東海林毅「山鹿市ハンドボール協会の普及方策 - 小学校におけるハンドボール授業導入の試み -」『体育・スポーツ経営学研究』第20巻、第1号（日本体育・スポーツ経営学会、2006年3月）p47
- 2) 宮川行志「読んでみたい論語・日本語 その7」『広報うき』平成27年10月号 No.153（熊本県宇城市発行）p25
- 3) 宮川行志「松田喜一 百姓の神様」中村貞夫編『熊本教育の人的遺産』、（熊本県退職校長会、2010年）p34～35